

# 美術科学習指導案

日 時 令和元年5月31日(金) 公開授業Ⅱ  
学 級 岩手大学教育学部附属中学校  
1年B組35名  
会 場 美術室  
授業者 高橋 知志

1 題材名 「木の〇〇を表現しよう」(風景写生をもとにした水彩画の制作): A表現

## 2 題材について

### (1) 生徒観

年度初めのガイダンスの時間に「鉛筆だけを用いて直径10cmの正円を描く」という課題で、生徒が鉛筆の使い方や形の取り方をするか観察してみた。円という形と10cmという大きさをどう認識しているか、筆圧を加減して鉛筆を用いることができるかを、これで見ることができる。鉛筆は①薄い線(アタリをとる)②やや薄い線(形を探る)③濃い目の線(形を決める)のような使い方ができることが理想である。しかしながら、描きたい形に近づけていくために鉛筆でいわゆる「アタリ線」を使って描く生徒はほとんどなく、また、筆圧を調整するなど鉛筆という画材の特性を活かした描き方もほぼ見られなかった。描画に苦手意識を持っている生徒ほどその傾向が強く、思うように描けないことについて、ではどうすればよいのかという具体的な取り組みが伴わないまま現在に至っているようであった。そこで描き方を指導したところ、多くの生徒に描き方の改善が見られ、ほんのちょっとしたポイントで自分の絵が変わることに素直な驚きを感じているようであった。

次の時間にはレタリングの基本的な学習をした。レタリングは、その文字を造形として認識し正しい字形を描くことができないと、自分の文字の癖が出てしまったりすることが多い。また、大きさを決める枠線を無視して小さく描いたりする生徒も多いのが例年の傾向である。今回は明朝体やゴシック体の文字を“見て描く”ことに円を描いたときの経験が活かされており、枠内にバランスよくレタリングの文字を描くことができた生徒が多かった。技術的な面での向上は作品として目に見える成果となって現れ、自身の成長として生徒も実感しやすい。まだ数時間しか授業を行っていないものの、これが意欲に結びついて、授業に積極的な生徒が増えたように感じている。

このように、授業には意欲的な生徒が多く、学習内容について新鮮な感動を味わいながら頑張ろうとする。中学校で初めて取り組む写生会をもとにした水彩による風景画の制作で、生徒一人ひとりに「できること」を少しでも多く増やしてやりたい。そうすることで、次年度以降も取り組むこの題材にポジティブなふり返りをさせることができればよいと考え、学習計画を構想していきたい。

### (2) 題材観

本校では毎年全学年で写生会の取り組みを行っており、夏休み前までの期間を使って授業の中で制作を進めている。写生会は学年ごとに午前中の時間帯を使って盛岡城跡公園に赴き、実質2時間程度の取り組みとして実施している。写生会中は各学級の担任が学級の生徒の構図の写真を撮って回り、その画像データを後日出力して生徒に配付して制作の参考とさせている。このように、本校ではその日のうちに完成まで持っていく“全日”の取り組みにはせず、写生会後の授業の中で指導してきた経緯がある。

また、学年ごとに異なった目標を提示して取り組ませていくことで、自分自身の成長を確認させたい

と考え、第1学年では「木を主題として自分が感じた情感を生き生き表現すること」、第2学年では「画面全体の雰囲気、奥行きのある構図で表現すること」、第3学年では学んできたことを生かして「残したい心の風景という主題で、風景描写に自分の主観を強く表現していくこと」という制作目標を定めている。このように主題が異なるので同じ場所に行っても構図を決める観点が異なり、その学年ならではの作品作りとなっていく。

表現するにあたっては、生徒個々がなぜその風景を選んだのかということから構想を深めさせたい。参考としての写真はあっても、画面の中に自分の感情移入を最優先させ、描くものと省くものについて明確な意思をもって取舍選択するように指導したい。観察して描くとはいっても精密デッサンとは違う。観察をすることで生徒が対象から何を感じるのか、その感じたことをどう表現するのかという主題性を大事に考えるからである。対象の見方や捉え方、感じ方を育てていくことで、学年が上がるにつれ「写真至上の感覚」から離れた作品が多く出てくることを期待している。

さらに、3年間を通しての取り組みであることから、2年目、3年目と、自分自身の成長を自覚できるような、取り組みの記録の充実とふり返りの工夫もしていきたいと考えている。

### (3) 教科研究とのかかわり

取り組みの当初に考えていたはずの主題を失い、単に参考資料の実景写真を複製する取り組みに走る。実景の写真を模範解答と捉えて、到達点を写真に求めてしまう。見た目はリアルに描けていたとしても主題性の面で面白みに欠ける作品になったり、写真と自分の作品の写実性のギャップから意欲を喪失していく、そういった傾向がここ数年続いている。生徒にとっての「良い作品」の定義が「技巧的でリアルなもの」となっていることが、自分の制作方針にも大きく影響している。作品の完成後に題名を付けるが、そこではととなる生徒も多い。題名を付けることができないのである。

絵を描くという仕事は単純な作業ではない。風景を題材にしても、作者が表現活動の着地点を自らが定めて、そこに向かって様々な工夫をしていくことに学びの本質が存在する。したがって、よりプロセスを重視した学習計画になることは自明である。

ただし、思いを深めたり広げたりするほどに、生徒は下描きの段階から「思いと表現のギャップ」を感じ、ストレスを蓄積していく。学習活動は、まさにこれを乗り越えていくために試行錯誤しながら取り組んでいくのであるが、技術的な手だてに限られていると、越えていくことができないまま終わってしまうこともあるだろう。これでは、「色と形で思いを表現するのは限られた才能を持つ人にしかできないこと」という認識を強めてしまうことにもなりかねない。

写生会直前には「ピーマンのスケッチ」に取り組みさせた。最初に自分のイメージだけでピーマンを描かせ、思ったことや考えたことを発表させたが、「実物が欲しい」という声は当然ながら多かった。次に実物を配付して観察によるスケッチをさせた。取り組み後の感想では「自分がイメージしていた形ではなかった」「実物を見ると気付かなかった細かいところがあり戸惑った」という声が多く出た。実物を観察して描いたスケッチの方が実物に近い表現になっているのは当然だが、授業ではあえて「イメージだけで描いた絵のよさ」を探させてみた。「不格好だがピーマンらしさを表現しようと単純な線で表現している」「無意識に一番ピーマンらしく見える角度で描こうとしている」「同じピーマンでも描く人の個性が強く出ている」等の意見が出され、ここで子どもたちは「イメージだけで描くのには限界があるが、実物を写実に描くだけでは作品の個性的な良さが出ないかもしれない」という考えに至った。

そうして迎えた写生会当日、例年は友人と連れ立って歩き回りなかなか描く場所を決めることができない状況が見られたが、この日はほとんどの生徒が「孤独になって」主役となる木を探し、稚拙だが思い切りの良い線の下描きに取り組んでいた。

### 3 単元計画

#### (1) 育成を目指す資質・能力

##### ①知識及び技能

- ・観察をもとにした鉛筆による描画についての基礎的な技能。
- ・水彩絵の具を用いた基礎的な表現技能。
- ・表現したいイメージを作品に具体化していくための、色彩や筆遣い等を構想する手法。

##### ②思考力・表現力・判断力

- ・共通課題である「木の〇〇を表現」を受け、「生命力」や「偉大さ」「あたたかさ」「生い立ち」などのキーワードをもとにして、対象となる木から主題を生み出す感性。
- ・自分で水彩画の制作過程を計画する力。
- ・感じたことを大事にして画面構成を工夫していく創造性。

##### ③学びに向かう力，人間性等

- ・安易に実景写真の丸写しを目標とせず，感じたことを大事にして構成した自分なりの表現を最後まで追究していこうとする主体的な態度。
- ・イメージした作品の具現のために解決すべき自分の課題点を発見し，自身で試行錯誤したり他者の取り組みから積極的に学ぼうとする意欲。
- ・他者の様々な表現に関心を持ち，そのよさを肯定的に感じとる審美眼。

#### (2) 指導目標

- ①形体や色の表し方など基礎的スキルを身につけさせるとともに，感性や想像力を働かせて表現意図に合う多様な表現方法を工夫させる。
- ②豊かに発想し構想する能力を育み，形や色の構成を工夫して自分らしい表現をさせる。
- ③木を主題にすることにより，身近な自然のよさや美しさに対する関心を持たせるとともに，意欲的に美術の基礎的能力を身につけていこうとする態度を養う。

#### (3) 評価規準

知識・理解	①全体テーマを理解し，対象から主題性を見出す視点について意識した構図の考え方について理解して取り組んでいるか。 ②形体や色の表し方など，鉛筆による描画や水彩画の基礎的スキルを身につけ，作品表現に活かすことができたか。
思考・判断・表現	③感性や想像力を働かせて豊かに発想し，形や色の構成を工夫して自分らしい表現を構想しているか。 ④自身の気づきだけでなく他者の意見や表現から学んだことを活かしてよりよく表現しようとしているか。
主体的に学習に取り組む態度	⑤身近な自然からよさや美しさを発見して関心を持つとともに，意欲的に美術の学習に取り組んでいるか。

(4) 指導計画及び評価計画 (12時間)

時間	主な学習内容と学習活動	評価 規準	見とりの視点
1	○ガイダンス ・写生会の取り組みについての概要を理解する (主題や当日の日程, 留意事項等について)	① ②	発言や学習シートの記述などから, 制作への意気込みを感じ取ることができるか
	○ピーマンを描く ・イメージだけで描くことと実物の観察による描画のメリット・デメリットを考える。	① ②	よりよく表現するための実物の観察, という意義に気付くことができたか
2	○写生会当日の取り組み ・主体的に描きたい場所を選定し描き始めることができる。 ・木から感じたことを大事にしながら自分らしい画面構想をし, 下描きを進めることができる。	① ② ③	友人と行動するのでなく, 単独行動で主題に向き合っているか
3 本時 2 / 3	○下描きの取り組み ・当日のふり返りをもとに, 自分の主題を確認し深める。 ・完成のイメージを模索しながら取り組む。 ・表したい主題を強調するために, どのような工夫をしていきたいかを考える。 ・対象物の主従の関係を考えながら描き込みを進める。 ・全体の感じをつかむようにあたり線を効果的に使って形体を描写していく。 ・細部を確認しつつ強い線も使用して下描きを仕上げる。	① ② ③ ④ ⑤	主題の表現を意識し, 意図的に画面を構築しようとしているか  実景写真を制作にどのように活かそうとしているか  下描きの描線を吟味して取り組んでいるか
5	○彩色の構想 ・主題を表現していくための色彩表現の多様性を知り, 表したい主題から色彩の構想を進めていく。	④ ⑤ ⑥ ⑦	概念だけによる単調な色彩表現でなく, 混色や重色で深く自然な色彩を追究しているか
	○彩色活動 ・彩色の計画を立て, 基礎的な技能について, できることやできないこと, できるようになりたいことなどをまとめ, 今後の課題設定をする。 ・遠景から彩色していく。 ・重色や混色で色彩を深め, 主題に迫っていく。 ・完成度を高めていく。		いきあたりばったりの取り組みになるのではなく, 手順を構想して進めているか  自身の課題を発見し, 解決のために妥協のない態度で学習に臨んでいるか  気付きを大事にし, よりよい表現のために試行錯誤して取り組んでいるか
1	○まとめる ・自分で定めた個人課題についてふり返る。 ・相互に鑑賞する。 ・取り組み全体をふり返り, まとめる。	① ②	自分の活動を客観的にふり返り, 成果と課題を前向きに考えてまとめることができたか  他者の様々な表現から学んだことを積極的に自分の成長につなげていこうとしているか

## 4 本時について

### (1) 主題

下描きの“ゴール”について考えながら取り組む

### (2) 指導目標

- ①どこまで描けば下描きの完了と言えるかということについて小集団による協議で考えたことをもとに、自分の作品に不足している要素を見出して課題化させる（思考・判断・表現）。
- ②現地で描いた自分の絵と写真に写っている画像との相違点を認識させ、修正すべき箇所とそのまま生かした方がよいと思う箇所を区別して、写真資料を有効に活用する意識を持たせる（思考・判断・表現）。

### (3) 評価規準

- ①「彩色の時に困らない状態」について具体的に考えを持ち、自分の作品に不足している要素を考えて課題化することができる。
- ②画面を構成する要素を主題表現のために取捨選択したり、強調するなどの工夫を試みたりというような、制作の方向性を構想して下描きの取り組みを進めていくことができる。

### (4) 授業の構想

写生会当日から2回目の時間である。前時は参考となる実景写真がないまま当日の様子を思い出して描くという時間であった。そのため、イメージを思い浮かべることができないまま途方に暮れた生徒もおり、当然ながら写真が欲しいという懇願も出されたが、あえて写真の配付はしなかった。本時はその続きということで、授業の冒頭では「自分の取り組みの着地点がわからない」生徒が大半であろうと見ている。そこに実景写真を配付されることで生徒は安易に写真を“模範解答”と思い込み、表現の方向性に大きな影響を受けることが例年の課題であった。

今年度は写生会の直前にピーマンのスケッチに取り組み、「写実表現だけを目標に描かれた精密デザインよりも、イメージだけで描かれたスケッチは稚拙かもしれないが作者の個性が出ている」ということを考えた。イメージで描かれたスケッチは、どの生徒の作品も「ピーマンが最もピーマンらしく見える角度」で描かれている。また、イメージのみで描かれた絵を作品として仕上げていくために、目的意識を持った実物の観察視点が重要であり有効であるということも学んだ。このようなことも全体で認識しあった上で当日の写生会に臨んだのだが、例年に比して「孤独になることができた」生徒が多かった。これまでは、いつまでも複数の友人と連れ立って歩き回った挙句に、友人の近くで適当に場所を定めて、無目的に絵を描く生徒が多くいた。これが制作意欲の形成の妨げとなり、安易に写真画像の再現を目標に定めて、中途半端な写実で終わってしまう指導上の課題に繋がっていた。今回はこのことがある程度解消されて、主体的に写生地点を探そうとする生徒が増えたように思う。

本時は授業の前半で「下描きの完了」について考える。これは次の「彩色」の取り組みをイメージしなければ見えてこないことである。彩色時に困らないようにすること、あるいは逆に、彩色時に困るような下描きについて考えていくことで、目の前の作品に足りていない要素を意識させたい。続いて、写真と作品の相違を検討することをきっかけに、生徒が「下描きのゴール」をイメージできるような展開にしたいと考えている。主題と照らし合わせて、描画すべきものや画面構成上の写真との相違点をどう判断していくか、ここに生徒の美術的な見方・考え方が反映されてくる。既習内容や過去の制作や鑑賞の経験がこの構想に具現されて来るからである。